

いかいゆう子 『近江の小倉百人一首』

にいぜき
新関伸也

天智天皇を祀る朱塗りの門の鮮やかな「近江神宮」は、皇紀二千六百年を記念して、昭和十五年に創建された新しい神社である。大津宮にはじめて漏刻台ろうこくだいがおかれた故事により、水時計が復元され、国内外の時計を展示している時計博物館も境内にある。

また、この神宮は百人一首の「競技カルタ」の殿堂でもある。境内の会館で毎年一月、全日本かるた協会が主催する「名人戦・クイーン戦」が開催されている。



サンライズ出版(2019)

上の句を読み始めた瞬間に、下の句のカルタを取る早業は、何度かテレビで目にしたことがあるはずだ。

近年では競技かるたの名人・クイーン位をめざす少女を主人公にした、末次由紀の漫画『ちはやふる』で有名となり、その後、女優広瀬すずが主演した映画でも話題となった。この「ちはやふる」で、近江神宮がロケ地となり、また沿線の京阪電車では二〇一二年に「ちはやふる」のラッピング車が走り、ファンを楽しませたことも記憶に新しい。これらに関連したグッズが神社境内で販売され、売れ行きも良さそうである。昨年の夏に妻と二人で訪れた際に土産や「ちはやふる」グッズの傍らで販売されていたのが、この『近江の小倉百人一首』の著書であった。著者は「小倉百人一首」から滋賀にゆかりある歌人や墓、関連の土地、歌碑から二十九首を選定して、自ら訪ねつつ、歌の解説と随想を綴る文学散歩案内書といふべき内容である。筆者によれば、約三割の歌が滋賀に関係しているという。その重みと歴史の深さに改めて驚いているところである。

天智天皇を祀る近江神宮にみられるように、萬葉の昔から近江には歌の舞台となったところが多く、国語や古典の教科書に掲載されている名歌も多い。ところが「小倉百人一首」を近江の観点で読んだことはなく、初めて知ることもしろいろあり、興味深く読み終えた。

さて、百人一首といっても実は諸々あるが、世に知られている代表は藤原定家による『小倉百人一首』である。この小倉版は飛鳥時代から鎌倉時代までの代表的な歌人百人を選んでおり、十三世紀に今のかたちができあがったらしい。その第一首が天智天皇の「秋の田のかりほの庵のときまをあらみわがころもでは露にぬれつつ」である。

ゆかりの歌人をざっと挙げてみよう。柿本人麻呂、小野小町、蟬丸、在原業平、菅原道真、紀貫之、和泉式部、紫式部、藤原俊成、西行、藤原定家、後鳥羽院など蒼々たる顔ぶれである。この人名を見ただけでも近江は、古くから、琵琶湖をはじめとした風光明媚な景色や交通の要所であるため人々の往来もあり、多くの歌詠みを刺激したに違いない。

ではこの百首のうち、直接の場所を詠んだ近江歌はいくつあるのだろうか。それが以下の五句である。

- 一、(十)「これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関」(蟬丸)
 - 二、(二五)「名にしおはば逢坂山のさねかづら人に知られでくるよしもがな」(三条右大臣)
 - 三、(五一)「かくとだにえやはいぶきのさしも草さしも知らじな燃ゆる思ひを」(藤原実方朝臣)
 - 四、(六二)「夜をこめて鳥のそら音ははかるともよに逢坂の関はゆるさじ」(清少納言)
 - 五、(九五)「おほけなく憂き世の民におほふかなわが立つ袖にすみ染の袖」(前大僧正慈円)
- これらで一番詠まれた場所としては京都から滋賀の境に位置する「逢坂山」「逢坂の関」の三句で、他は「伊吹山」と「比叡山」が各一句である。

特にこのたび取り上げてみたいのは、三つ目の五一番の藤原実方の次の歌である。もともとは『後拾遺集』に収められている。

かくとだに えやはいぶきの さしも草 さしも知らじな 燃ゆる思ひを

歌意は「こんなにも恋い慕っているということを貴方にいうことができませぬ。伊吹山のさしも草が燃えるように、これほど燃えあがる私の思いをしらないでしょうね」となる。歌としては、かなり技巧的で「燃ゆる思ひ」の「ひ」は、「火」に掛けており、また「さしも草」は「いふ(や)」と「いぶき」に掛けている。そして、あとにつづく「さしも知らじな」の音を導く仕掛けとなっている。これらの技巧のため、歌の賛否は分かれている。

いずれにしても「さしも草」は、この歌で重要なキーワードとなっていることは、間違いない。そして「いぶきのさしも草」は、滋賀県と岐阜県にまたがる伊吹山(一三七メートル)でとれるもぐさ(艾)のことで、別名ヨモギである。綿のように乾燥させたもので、今でもお灸に用いられている。この昔から、お灸があったのだから伊吹山の歴史も相当古い。古代では『養老律令』や『延喜式』に熟艾もぐさの記述が出ており、灸治療は貴族など上流階級に限られたらしく、簡単に庶民は、お灸を据えられなかったであろう。ただ、江戸時代ともなれば、庶民にお灸がずいぶんと普及している。中山道柏原宿にある老舗「亀屋左京」は、安藤広重の浮世絵に登場するほど有名となり、今も「いぶき艾」の暖簾を掲げている。

さて話は、実方なる人物に戻るが、ずいぶん起伏の多い人生であった。「枕草子」を書いた清少納言と恋仲だったり、宮殿での狼藉、いわゆる藤原行成との諍いさかいを一条天皇からとがめられ「歌枕

見て参れとて」と陸奥守として左遷されたりしてしまふ。現地で落馬で没したが、清涼殿に雀となつて戻つてきたという説話も残っている。

陸奥国の実方の墓は、今の宮城県名取市にあり、西行が竹林の中でそれを発見して悲しみに浸りながら「朽ちもせぬその名ばかりをとどめおきて枯野の薄形見にぞ見る」と歌を詠み、後の芭蕉も『おくのほそ道』で墓参りを試みたが悪天候でやむなく阻まれた、と記している。都の貴族が辺境の陸奥の地で若くして没したとなれば、のちの歌詠みたちの寂寥感をことさら誘つたに違いない。



伊吹山